



台風11号が北上し、北海道も大雨に見舞われ、道内あちこちらの被害がニュースで流れた。地球温暖化の影響で水蒸気量が増加しており、大雨の頻度が高くなっているという。世界の平均気温は100年で約0.7度上昇しているが、最近50年の上昇率はこの2倍と大きく、さらに高緯度ほど気温の上昇は大きい。北極域の平均気温は世界の平均気温の上昇率のおよそ2倍の速さで上がっているという。わが国の観測結果では、過去100年において、自然災害につながる可能性のあ

日本の未来図は？

情報広報部副部長

藤井 美穂

る1日の降水量が、100mm以上発生する日数が増加しており、この大雨は東アジアの広い範囲で共通した現象という。全国で「観測史上最高」の雨量、風速、気温を耳にすることが多い。校正中に接したニュースに驚いた。8月20日夜半、広島市北部の豪雨・土石流災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたい。

世界の低炭素エネルギーへの変換による温室効果ガス削減は、人口増加と経済成長によって逆転してしまった。再生可能エネルギーの技術は進み、種類もエネルギー量も増

加しているが、1993年以降原子力エネルギーによる発電量は減り、低炭素化は足踏み状態である。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)では温室効果ガスの発生量を社会発展の方向性で予測している。経済発展を重視した将来の世界を目指す方向性をA、環境との調和を図る世界を目指すものをBとし、縦方向のスケールを作り、横のスケールを地域格差が縮小しグローバル化が進展する世界を目指す1、反対に各地域の独自性が強まる多元的世界に誘導する方向性を2とする。例えばA1は高度経済成長が続ぎ、グローバル化の進行により地域間格差が縮小する社会であり、逆に経済発展よりも環境重視を目

指しそれぞれの地域の特性を育てる社会はB2である。IPCCは未来社会をA1タイプと仮定し、温室効果ガスの発生量を計算、地球の温暖化を予測している。

日本の未来図はどうであろう。経済成長とグローバル化を押し進める安倍政権の選択は、IPCCが仮定した世界の将来図と同じである。確かに中国やインドなど、人口と国土面積の広大な国では必要な選択であろうが、すでに成熟した国家である日本の将来は、むしろIPCC分類のB2にシフトす

べきではないだろうか。超高齢社会、少子化の日本の現状を力でA1に誘導するのは難しい。経済成長を維持するための労働力不足を補填するために外国人労働力を導入し、企業には成果主義を導入、ゆとり教育を廃止し競争を求める。医療から介護へシフトする一方で、世界にアピールし経済成長誘導につながる先端医療と先端研究には手厚い支援。戦後69年、復興から戦い続けてきた日本に突きつけられた課題の本質を解決するのではなく、強引に経済大国を目指した昔に戻そうとしているように見える。国という集団はヒトが年をとるように加齢が進み、次世代が産まれ育つはずの自然のサイクルが回らず、少子化が進んだバランスの悪い集団になってしまった。研究の魅力を教育されず、研究成果だけが求められた結果、企業の成果主義と癒着した数々の不正、STAP細胞をめぐる一連の悲劇は、時間をかけた教育がされてこなかったことが、世界にさらけ出されてしまった社会システムの悲劇である。

現政権には、課題の一つひとつを丁寧に考察しながら、時間をかけて解決する時がまさに今であることを深刻に受け止めて欲しい。地球レベルの自然の変化も社会の人口構成も大きく変わる今、戦後築いてきた価値観を崩すことを恐れることなく、大胆なクラッシュ・アンド・ビルトが求められていることを自覚したい。